

追放令嬢の私が魔族の
王太子に溺愛されるまで



はるみさ

Harumisa

目次

追放令嬢の私が

魔族の王太子に溺愛されるまで

書き下ろし番外編

夢の学園生活

追放令嬢の私が
魔族の王太子に溺愛されるまで

プロローグ

「僕の運命の人は……君だ」

そう言って、彼は彼女の足元に跪いた。彼女は、感動にその大きな瞳を潤ませて、彼に手を差し出す。その傷一つない真っ白な手に、彼はキスを落とした。二人は熱のこもった視線を絡ませ合う。

「マーガレット、愛している。僕には、君だけだ。……どうか、僕の伴侶となってほしい」

「私も……ブルーズ様をずっとお慕い申し上げておりました。ずっと側に置いてくださいませ」

彼は承諾の返事に微笑み、立ち上がる。そして、二人は強く抱きしめ合った。

元々、彼から指示を出されていたのか、宮廷楽団がタイミングを見計らったように、音楽を奏で出す。周りもうっとりしたように、二人を見守っている。彼女の父であるカ

シヤーム伯爵など涙ぐんでいるほどだ。

そんな安物の芝居のような光景が繰り広げられる一方で、私は叫び出しそうだった。今すぐに真横にあるテールブルクロスを引っ張って食事をひっくり返し、手当たり次第にワイングラスを床に叩きつけ、彼に飛び蹴りを食らわせてやりたい……と心の中で思っていた。

なぜなら、彼……トゥグル帝国の王太子ブルーズが跪いて、婚約を乞う相手は自分だと数十秒前まで疑いもしていなかったのだから。

だからといって、ここで私が騒ぎ立てても誰も信じてくれず、頭がおかしい奴だと思われるのは目に見えていた。プロポーズされたマーガレット嬢は伯爵令嬢、かたや私は子爵令嬢。どちらが王太子妃にふさわしいかなんて言うまでもない。

ここで騒ぎ出しても、損をするのは私一人だ。今は耐えて、真相はあとでブルーズに問い質そう……私はそう決めて、強く拳を握りしめた。

しかし、私の怒りのこもった熱い視線にブルーズが気付いたようで、マーガレット嬢をその場に残し、彼は私に歩み寄ってきた。それと同時に来場者の視線も私に集まる。

彼の口から出るのは、謝罪の言葉だろうか……それとも弁解の言葉だろうか……。せめて誠実な言葉を期待したい。私はまっすぐに彼の瞳を見つめた。

すると、ブルーズはにつこりと私に笑いかけた。悪びれもしないという予想外の反応に私は哑然とする。そして、くるっと私に背を向けると来場者に向けて、高々と演説を始めた。

「会場の皆さんの中には、本日、僕がこちらのリリアナ嬢に婚約を申し入れると思っていた方もいらつしやるかと思いますが……それは全て悪意ある方々が流したデマです！僕はリリアナ嬢とは何の関係もありませんし、ましてや二人で会ったことなんて一度もない！しかし、この噂のせいで、ずいぶんとマーガレットにも辛い思いをさせてしまった……。カシャム伯爵、マーガレット……改めて、本当にすまなかった」

は？ 私と関係がない？ 二人で会ったことがない？

そんなはずがない。私たちは恋人同士なのに。

それどころか、私は婚約者候補として王宮に私室を与えられている。そこにこの一年間通い、王太子妃教育を受けてきた。確かに婚約は正式なものではなかったし、嫁入り前ということもあり私の存在は隠されていたが……

「ブルーズ？ あなた……一体何を——」

「リリアナ嬢、このような場で僕を呼び捨てにするなど不敬だぞ。とはいえ、そなたとはこれからも長い付き合いになるのだ。今回は許してやろう」

長い付き合い？ どういうこと？ やっぱりブルーズは私を^{からか}揶揄っていただけで——

そう思った瞬間、私の耳には信じられない言葉が響いた。

「皆様、リリアナ嬢は隣国である同盟国、シルワ国の王太子に興入れするべく、王宮でこの一年間、教育を受けてきたのです。そのため、あのようなデマが広まってしまったのだと思います。未来の隣国の王太子妃ということで優しく接していたのですが、彼女は何か勘違いをしてしまったようで、私に馴れ馴れしくて困っていたのです」

信じられない嘘の数々に言葉を失う。それと同時に会場が一気にざわめいた。

「シルワって、あの魔族の国の？」

「あんなところに嫁ぐなんておぞましい……」

「動物のような連中だと聞いたぞ」

「納得したわ、子爵令嬢なのに殿下のお相手なんておかしいと思ってたのよ」

「殿下もあんな田舎娘にまわりつかれて、お可哀想に」

頭が真っ白だ。でも、クスクスと笑うマーガレット嬢と、私を嘲笑うような視線を向けるブルーズを見て、裏切られたことだけはわかった。

もう我慢できなかつた。一言文句を言ってやろうと、口を開きかけた瞬間、ブルーズは私の耳元で囁いた。

「そなたの生家と、妹君がどうなってもいいのか？」

「……っ！」

燃え上がった怒りは、急に水をかけられたように消え去り、背筋が寒くなる。

私が口を噤んだのを彼は鼻で笑うと、続けてこう呟いた。

「ここで騒げば、ベルモント家の娘は皇帝家に不敬を働いたことになる。そうなれば、ただでさえ没落寸前の君の家は、他の貴族からの信頼も失うことになって……ククッ、没落するだろうな。そして、君が必死で守ってきた妹の治療もできないんじゃないか？」

最低だ。こんなに酷い男だと思わなかった。今日の今日までそれにまんまと騙されていた自分が情けない。私は横目で彼を睨みつけた。

「……この、卑怯者！」

「なんとも言え。こんな状況になっても涙の一つも流せない可愛げのない女など、要らない。お前のその人を見下す態度がずっと気に入らなかった。僕に必要なのは、マーガレットのような可憐な女性だよ」

可憐と評された彼女は、勝ち誇ったような卑しい笑みをこちらに向けている。その笑顔に可憐さなんて欠片も感じられなかった。

それでも、選ばれたのは彼女だ。私はただ唇を噛みしめるしかなかった。

私を一人残して、クルツとブルーズは身を翻し、マーガレット嬢の元へ戻っていく。

……許せない。しかし、悔しさが涙となって流れそうになったその時、ブルーズの頭に小さな影が飛び乗った。

それは、私の小さな親友である、妖精のアイナだった。彼女は怒りの形相でブルーズの頭を殴り、蹴り、唾まで吐きかけていた。

彼女の姿は私にしか見えないし、彼女の攻撃はブルーズにもちろん効かないが、その姿は私に勇気を分けてくれた。

……私は微笑み、自分に言い聞かせるように呟いた。

「そうよね……こんな奴に負けるもんですか」

そして、背筋をぐっと伸ばし、完璧な笑みを浮かべる。

「身に余る素晴らしいご縁を与えてくださった王太子殿下に心から感謝申し上げます。シルワ国の発展に寄与し、必ずや国交を通じ、この恩を……何倍にもして、返しますわっ!!」

私の宣言に周りは哑然としている。だが、ブルーズやマーガレット嬢は、ただの強がりを持っていると思っただけなのか、二人でクスクス笑い合い、私を馬鹿にしたように見

つめた。

覚えてなさい……隣の国からあんたらをぶっ潰してやるんだから……っ！

こうして、私はシルワ国へ嫁ぐことを決めたのだった。



精霊が司るこの世界には、人族、獣人族、エルフなど複数の種族が住んでいる。その中で最も多くの人族が住んでいるのが、ここトウグル帝国。大陸の南東部に位置した大國だ。時々、周辺国との諍いいさかなども起こったりするが、優秀な騎士団のおかげもあってか、大きな被害もなく、ここ数十年の国政は安定している。

私、リリアナは、そのトウグル帝国のベルモント子爵家長女として生まれ、現在十八歳になる。

母は妹を産んですぐに亡くなってしまったので、子爵である父と二つ上の兄、四つ下の妹の四人家族だ。

我が子爵家の特徴を一言で表すとしたら、ずばり貧乏。昔、父が事業に失敗し、一気に貧乏貴族となった。父は私たちへの申し訳なさから必死に堅実な領地運営をするよう

にはなったが、経済状況はさほど変わらなかった。将来この僅かな地を受け継ぐ兄は、貴族学園を卒業した後、現在は給料の良い外交官となり、家にお金を入れてくれている。妹は生まれた時から身体が弱く、十四歳になる今もベッドから離れることができない生活が続いている。だが、母によく似た明るく可愛らしい彼女はこの家の中心で、家族の愛情を一身に受けている。

一方で、姉の私は紫の瞳こそ大きいものの猫のように尻尻が吊り上がり、身長も高く、可愛いと言われる要素は全くない。頼れる姉としての私の役割は、料理洗濯掃除などの家事はもちろん、妹の世話から家庭菜園まで。うちには年老いた侍女が一人しかいないため、私がやらなくては家が回らないからだ。家族のため、妹のため、なりふり構ってなんていらなかった。

しかし、私が貴族の子息子女が集まる貴族学園に入学したことで状況は一変した。私は、王太子であるブルーズに見染められたのだ。

最初は、田舎から出てきた他とは違う毛色の私がかたがた物珍しくて挪揄っているだけだろうと思っていた。しかし、私がどんなに冷たくあしらってもブルーズはめげることなく、私へのアプローチを繰り返した。「美しい」「好きだ」と毎日のように私の隣で囁き、片時も離れようとはしなかった。

今思えば、私は他人からの愛情に飢えていたのだらう……そういった言葉は全て妹に贈られるものだったから。そんな中、浴びるように愛の言葉を贈られて、私は彼が本当に私を愛しているのだと勘違いをした。

貴族学園には普通二年間通うのだが、私はブルーズの要請に従って一年で学園を退学し、一年後の婚約発表に向けて、王宮で王太子妃教育に明け暮れることになった。

学園に通えなくなったのは残念だったが、講師らに子爵令嬢はなつてないと何度馬鹿にされても、ブルーズのためならばと頑張った。

……が、その結果は魔族の国シルワへの興入れだったわけで。

シルワ国はこの世界で最も人口の少ない種族である魔族が治める国である。真偽は不明だが、その昔畏れ多くも精霊王を害したことで、精霊王の加護を失った土地の貧しい国だ。そのため、精霊が守り神とされているこの世界では、魔族と交流を持つとうとする国はおらず、トゥグル帝国が唯一の貿易国であり、同盟国である。

彼ら魔族は、その祖先と頭に残る角からして魔族と呼ばれているが、特別な力などないらしい。角がある以外は人間とほぼ同じだが、本能が強く、人よりも動物に近い種族だと講義では習った。どちらにせよ、帝国が潰そうと思えばすぐにひねりつぶせる存在であることと、同盟国といってもほぼ隷属国のような扱いをしていることだけわかった。

ただ同盟の規約に沿って二十年に一度、帝国から貴族子女を魔族の王族へ嫁がせることにはなっている。そして、奇しくも今年がその二十年の節目だったのだ。

「いくら私が邪魔だからって、シルワに送るなんて信じられないわ！ あー、もう!! 道ぐらい舗装しておきなさいよね!!」

私は国境に向かう馬車の中で叫んでいた。朝からずつと馬車に揺られて、お尻が痛いせいもあり、私は怒りを蒸し返していた。

「大体何のために私が一年間も王太子妃教育を受けてきたと思ってるの!? 私が講師に罵倒されながらも必死に勉強してる時に、他の女とイチャついてたなんて、信じられない!!」

「リリ。そんなこと言っていないの? 不敬罪で捕まるわよ?」

「はっ! 上等よ! そしたら、広間の斬首台であることないこと、国民の前で叫んでやるわ! あいつの名譽を地に落としてやるんだから!!」

アイナは向かい側の席で横になっていたが、ピュンと跳ね上がると私の頭の上に飛び乗った。そして、私の頭をベシペシと叩きながら、鈴が鳴るような声で話す。

「そんな元気があるなら大丈夫ね。大体私は最初から反対してたじゃない。なのに、あ

あなたがあの浮気男に絆^{はだ}されたりするからいけないのよ。私、言ったわよね？ 王族の男が一人を愛することなんてできないって。あいつらはタネを撒くことが仕事なのよ」

まったく……姿も声も可愛いのに話すことが下品なんだから。

この世界には精霊の遣いとされる妖精がいる。精霊の力の一部を与えられた尊い存在だが、その姿を見た者はほとんどいない。稀^{まれ}に気に入った者だけに姿を見せることがあるが、その真偽は定かではない……そう本には書いてあった。とはいえ、私の友達は隠れることなく、出会ってからずっと私から見えるところにいるが。

アイナは、体長が十センチほどという可愛らしいサイズで、その背中には小さな翼がついている。ピンク色の髪を二つのお団子にまとめ、長いまつ毛の下にピンク色の瞳を持った砂糖菓子のような風貌だが、その小さな口から発せられる言葉は微塵も甘くない。

彼女との出会いは私が七歳の時。裏庭にかぼちゃの種を植えようと土を掘り返していたら、その中にいたのだ。彼女は私と会った時、かなり弱っていたため、咄嗟に姿を消すことができなかったらしい。私は慌てて傷ついた彼女を自分の部屋に連れて帰り、元気になるまでお世話をした。

しかし、元気になってからも彼女はそのまま私の側に居座った。アイナは記憶喪失で、帰る場所がなかったのだ。

彼女の話によると、妖精は自分の住まう土地が決まっていて、そこであれば本来の力を發揮できるらしいのだが、彼女は自分がどこから来たのか覚えていなかった。気付くとどこかに閉じ込められていて、そこから必死に逃げ出してきたのだという。しかし、妖精は縄張り意識が強いので、このあたりの妖精に彼女はいじめられ傷つき、上手く力を使うこともできず、土の中に隠れていたのだということだった。それ以来、彼女はずっと私と一緒だ。

皆が妹のニーナばかりを気にかけて、私が誰にも相手にされない時も彼女だけは私の側にいてくれた。

そんな彼女は、私より自分の方が年上だと思っているらしく、常にお姉さんぶって、何かあるとすぐに余計な口出しをしてくる。無論、ブルーズからのアプローチについても、的確にアドバイスと警告をしてくれていた。だけど、その意見を押し切って、あのバカ王子の婚約者候補となることを決めたのは私だった。

「王太子にあんなに熱心に口説かれたら、誰だっけ了承するしかないわよ。国随一の権力者なのよ？ 金持ちなのよ？ あの状況で断られる令嬢がいたら、顔を見てみたいもんだわ」

「リリなら断れたと思うけど。別にあいつのこと、最初から好いてなかったじゃない。

笑顔が嘘くさいとか言つて」

「私も所詮は普通の令嬢だったってことね」

「ふーん。領地に帰れば、鍛や鍋を振り回してる令嬢が普通なの？」

「そんなの他にもいるわよ。でも……まあ、結果的にはこうなって良かったのかもしれないわ。蓋を開けてみれば、輿入れを承諾した謝礼として皇帝家から実家にはすごい金額が入ってきたわけだし。あれだけのお金があれば、借金の返済もできるし、ニーナもちゃんとした治療を受けられるはずだもの。きつと若くて優秀な侍女も雇えるわ」

「……そうね。でも、大丈夫なの？ 魔族が夫になるのよ？」

「別に。見た目も人間にツノつけただけみたいだし、言葉が通じるなら大丈夫よ。一応王太子妃として行くんだし、殺されたりなんかしないでしょ。徐々に味方を増やして、国を豊かにして、いつかは帝国に勝る国にしてみせるわ！」

息を巻いて言う私に、アイナは呆れ顔で告げる。

「すごいやる気ね。周りには人間がいないし、どんな扱いを受けるかもわからないのに」

「なんだって、私は子爵家出身なのに王太子妃になろうとした凶太い神経の持ち主なのよ？ それに今は人間の方が信用できないわよ」

「あはは、さすがリリ。心配して損した」

「それに私の親友も人間じゃない。けど、一番の味方でしょ？」

「私のことだってわかるけど、その言葉、身体が痒くなるからやめて」

「はいはい。でも、本当にアイナがいてくれて良かったわ！ 二人でシルワ国を盛り立てていこー!!」

「私は隣にいるだけよ？」

そのため息を吐きながら、私の肩に彼女は降りてきた。面倒そうにしているが、本当は頼りにされて嬉しそうだ。とんがった耳の先がピンク色に染まっている。

「ふふっ、頼りにしてるわー！」

私たちは笑顔を交わして、指と拳を突き合わせた。

馬車は、私とアイナの運命を乗せて、シルワ国へと速度を上げた。

第一章 お人好しの王太子妃候補

私とアイナを乗せた馬車がキキーツと乱暴に止まる。少しすると、馬車の扉がノックされた。

いよいよこの時がきた。シルワ国の王族が住むという城へ着いたのだ。

私は大きく深呼吸をして、アイナと目を合わせ、頷き合った。

「開けて、ください」

私がそう返事すると、馬車の扉が開かれ、目の前に大きな掌てのひらが差し出された。

顔を上げて、その手の持ち主に目を向ける。

高い鼻梁に、形の整った唇、燃えるような赤髪、そして、鋭い目つきの奥にある吸い込まれそうな真つ黒な瞳……

（なんて……綺麗な……）

あまりの美しさに私が見惚れていると、彼は眉間の皺を濃くして、短く言い放った。

「……魔族の手など触りたくもないか」

「え？ そ、そんなことは!!」

私は慌てて手を重ね、馬車を出た。こんな綺麗な男性にエスコートされると思っていたなかつた私の顔は火照ほてる。私の隣を歩く彼は背が高めの私でも見上げてしまうほど高い……足が長いかな。ブルーズは背が低かつたから、この身長差はなんとというか……すごく、嬉しい、かも。それに繋ぐ手がごつごつとして、なんか男らしくて……。気付けば私は彼の手を確認するようにしっかりと握っていた。

すると、それを押揃うようにアイナがニヤニヤとして、彼の頭上を飛んでいた。私は彼女をひと睨みすると、彼女はスツと姿を消した。まったく妖精だなんて信じられないような下世話な笑みだった。

私が彼のエスコートに従って進むと、私の前にシルワ国王陛下が歩み出た。陛下の顔は以前絵姿を確認したことがあるので知っている。ということは、今、私をエスコートしてくれたのが、私の夫となる王太子なのだろう。

彼は陛下の前まで来ると、あっさりと手を離し、不機嫌そうに陛下の隣に立った。あからさまに歓迎されていないその態度に寂しい気持ちがないわけでもないが、もう恋愛に振り回されるなんてこりこり。生きるために彼と結婚する、それだけだ。

その時、初めて彼の頭に黒いツノが二本生えていることに気付く。頭の方からちよこ

んと出た角の先は丸みを帯びていた。禍々しさは一切感じられず、むしろ獣人族の耳のようでも愛らしい。

（見た目はほぼ人間と同じだし、対応もしつかりしてる……。帝国で教えられたシルワ国についての内容は、ほとんど参考にならぬさうね）

陛下が柔らかな笑みを浮かべ、一歩前に歩み出た。線の細い優しそうな方だ。陛下の頭の上にも黒く輝く角が二本あった。

「リリアナ・ベルモント嬢。ようこそ、我がシルワ国へ」

私は国王陛下の対応が思ったよりも優しいことに安心して、礼を執る。

「陛下、どうぞリリアナとお呼びください。今後はシルワ国の王太子妃として、国の発展に寄与できるよう尽力する所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします」

そう私が告げると、それを馬鹿にしたように鼻で笑う声が出た。

私がそちらに視線を向けると、陛下は慌てたように隣の彼を窘めた。

「ゼノ」

しかし、陛下の注意をものともせず、彼は私にどこか軽蔑したような視線を向ける。

「人間がこの国の発展を願うなんてありえない。今までこの国に嫁いできて、我が国のために尽くした妃などいなかった。俺たちを馬鹿にするのもいい加減にしろ。俺は、お

前を認めるつもりなどない」

酷く冷たい声でそう言い放ち、彼は私を睨みつける。

そう言われても、特に傷つきはしなかった。隷属国のような酷い扱いを受けているのだ。彼が帝国民であった私を信じられないのも想定済みだ。

しかし、私に帰るところはない。私と彼の関係がどうであれ、ここで生きていくしかないのだ。

ただ王太子であり、今年が二十年の節目である以上、帝国から一人は娶らなければいけないことは以前からわかっていたはずだ。なのに、この態度……

彼は帝国も、その人間もよく思っていないのだろう。血の気が多くて、帝国を嫌になくらいが私にとっては都合が良い。愛し愛されるパートナーとはなれなくても、帝国に反抗するパートナーとなれたら嬉しい。

「認めていただけよう、頑張りますわね」

私がそう微笑みながら小首を傾げると、彼は顔をカァツと赤くした。おちよくられたとでも思ったのだろうか？

彼はその顔を隠すように踵を返し、一人、その場を去るようだ。陛下が呼び止めたが、彼はこちらを見ることもなく、呟いた。

「エスコートをするという約束は守りました。その人間のせいで気分が悪くなったので、俺は部屋に戻ります」

結局、そのまま彼は去った。陛下は頭が痛いようで眉間を揉んでいる。

……確かにあの息子じゃ頭も痛くなりそう。私より四歳も上だと聞いていたが、まだまだ反抗期真っ只中という感じだ。

「申し訳ない……。先ほどの私の息子で、王太子のゼノだ。まだゼノは、この結婚に納得していなくて……。近いうちに説得をするので、どうか時間をいただきたい」

陛下がそう言って頭を下げる。

普通、一国の主がこうも簡単に頭を下げるべきじゃないと思うが、トゥゲルとシルワの関係性からすると仕方のないような気もする。

しかし、私も今日からシルワの国民なのだ。この態度を受け入れるわけにはいかない。「陛下、どうぞ頭を上げてくださいまし。私は陛下の国民です。陛下のご指示であれば、王太子殿下が納得されるまでお待ちします。それまでは婚約者という肩書で構いません」

「わかった。では、ぜひそうしてほしい。まったく……。仮にもゼノはリアナ嬢より年上だというのにまだ子供で恥ずかしいよ」

「とんでもありませんわ。男性は少し尖ってる方がカッコいいと思いますわ」

「ははっ！ 面白いお嬢さんだ。ありがとう。今回の花嫁は話を通じる方のように嬉し
いよ」

陛下は私の手を握るように握り、笑みを浮かべた。



シルワ国に来てから、五日が経った。私は思ったよりも早く新しい環境に慣れた。

今の時期、シルワは帝国より寒かったが、元々実家で薪を節約するために寒さに耐えていた私には十分耐えられるほどだった。食事は薄味で質素であったが、元々野菜クズのスープを飲んでいたので私からすれば、それさえも豪華に感じられたし、数は少なくとも揃えられたドレスはどれも質が良かった。自分のことは自分でできるのに、世話役として複数人も専属侍女を与えられそうになり、専属は一人でいいと減らしてもらったくらいだ。貧しい国ながらも必死に私の身の回りを揃えてくれたのが、よくわかった。

ただ居心地は悪かった。王太子殿下の婚約者という肩書のせいかな、はたまた私が人間だからなのか、とにかく周囲が腫れ物扱いするかのよう私に対応するからだ。

皆、私が話しかけただけでビクビクするし、空気がひりつくのがわかる。私の姿を少しでも見かけると方向を変えて、散らばっていく。

意地悪をされているわけではないが、皆は私と関わることを恐れているようなのだ。その理由は私の顔つきがキツいから……だけではないと思う。

ほとんど寝る準備も終えて、机に向かって、日記をつける。目の前には、机の上ではしたなく寝転びながら、夜食の林檎を頬張るアイナがいた。

この妖精、シルワ国に来てから、やたらとよく食べるようになったわね……

「アイナ、何かわかった？」

「まったく。精霊の遣いである妖精に盗み聞きみたいな真似させて、バチが当たるわよ」

アイナは指についた林檎の汁をチュパッと舐めた。気品に欠けるその行為……精霊の遣いなんてよく言えたものだ。

「はいはい、ありがとうございます、精霊の遣いのアイナ様。で、なんで私がこんなに恐れられているかわかったの？ 顔？ このキツい目つきのせい？」

「違うわよ。どうやら過去に嫁いできた人間のせいみたい」

「あー、やっぱり？」

「今までシルワに嫁いだ人間は、どの令嬢も酷かったらしいの。食事がまずい、ドレスや装飾品が少ないとか文句ばかりで……とにかく横暴に振る舞う人が多かったみたい。中には失礼なことをした侍女を帝国の権力を盾に処刑しろって騒いだ人もいたみたいよ。でも、それだけならマシなもので、ここで生きていく現実を受け止めきれなくて……放火したり、壊れちゃった人もいるみたい」

私はグツと唇を噛みしめた。確かに帝国で育ってきた生粋の貴族令嬢がここで暮らすのは辛いかもしれない。過去にシルワに来た令嬢のリストを確認したら、どの女性も高位貴族だった。シルワは寒いし、食事も帝国と比べたら粗末だし、物資も不足している環境が良いとは言えない。

そんな中に生贄いけにえのように放り込まれて、今まで嫁いできた彼女たちは絶望したのである。だからといって、この国の人々を傷つけて良い理由になんてならない。

ムシャムシャと林檎を食べるのをやめないアイナに私は問う。

「私がまともに振る舞えば、周囲の人たちも警戒を解いてくれるかしら？」

「まあ、きつと、いつかはね。基本的に関わりたくないと思ってるみたいだから、かなり時間がかかるとは思うけど」

「あー、もう！ まどろっこしいわ！」

私が頭を抱えて机に突っ伏しても、アイナは慰めてもくれない。それどころかチツチツと指を左右に振って、偉そうだ。

「人間関係の構築というものは、そう簡単にできるものじゃないのよ、リリ？」

「はあ……わかってるわよ。でも、あんなにビクビクされたんじゃ何かをお願いするのも気が引けるの！ 彼女たちに私がどれだけ気を遣っていることか……これなら、まだ敵意をむき出しにされた方が遠慮なくやれるから楽なのに」

「リリは、相手がやってくれば、打ち負かしてきたものね」

「時間をかけるしかないのかしら……」

私は目を閉じて、専属侍女のベルナの顔を思い浮かべていた。

ベルナは、私の唯一の専属侍女で、白い小さなツノに可愛らしいおさげと眼鏡がトレードマークだ。侍女になって日が浅いらしいのだが、専属侍女を決める時に彼女だけが立候補してくれた。侍女長は経験が少ないからと反対していたが、私が彼女でいいと言った。どんな理由か知らないが、やりたいと立候補してくれたのが嬉しかった。

しかし、彼女は人一倍、私に怯えていた。少し紅茶が薄いと指摘すれば目に涙を溜めて土下座をしようと膝をついたし、私に物を渡す時は緊張で手が震えるほどだった。

アイナなんてベルナがビクビクする様が捕食された子うさぎのようだと、彼女をうさぎちゃんと呼んでいた。

その時、扉がノックされた。

「姫様、よろしいでしょうか？」

ベルナだ。彼女は寝る前によく眠れるようにと温かい飲み物を用意してくれる。

私は林檎を持ったアイナが姿を消したことを確認して、返事をした。

「ええ、入って」

ベルナがそっと入室し、扉を閉める。私はノートを閉じて、彼女に向き直った。

「いつもありがとう。すっかりあなたに淹れてくれたお茶を飲んで寝るのが習慣になったわ」

彼女は緊張したように顔を赤くして、背筋を伸ばした……が、いつもとんだか雰囲気が違う。なんとというか、やせ我慢しているような……

「き、気に入っていたただけなのであれば、光栄です！ あの……今日は、こ……これで失礼いたします」

「え、ええ……」

いつもなら何か困ったことがなかったか、今日のように図書館に行った日なら気に

入った本はあったか、などと少しは会話をしてくれるのに、今日は足早に帰ろうとする。しかし、ベルナがドアノブに手をかけた、その時——
足からフツと力が抜けたように、その場で彼女は倒れた。

「ベルナっ!!」

私は彼女に駆け寄る。数回呼びかけてみるものの反応はない。先ほど顔が赤いとは思っていたが、額を触ってみるとすごい熱だ。

「大変……っ!」

私は急いで彼女を私のベッドに運び、寝かせた。服を緩め、楽にしてあげて額に濡れたタオルを載せる。水差しを口に運ぶと、彼女はコクンと喉を鳴らした。

「水は飲めるみたいね。なら……」

私はゴソゴソと帝国から持ってきた僅かな荷物の中を漁った。アイナが呆れたように私の肩のため息を吐いた。

「どこに侍女の世話をする王太子妃がいるのよ」

「ははっ。やっぱり世話されるのは性に合わないってことね」

それに具合が悪い彼女を見ると、妹のニーナを思い出してしまふ。放ってなんておけるはずない。

「あった!」

私が手にしたのは、熱冷ましの乾燥薬草だ。ニーナがいつ熱を出すのかわからないので、常に鞆かばんに入れておくようにしていた。それがこのシルワで役に立つとは思わなかったけれど……

「ふふっ。本当お人好しだわね、それでこそリリだけど」

なぜかアイナは嬉しそうだ。

私は薬草をすり潰して、飲みやすいようにする。水と共にベルナの口に流し込むと、彼女は少し渋い顔をしたが、最終的には飲み込んでくれた。

「効いてくれるといいんだけど……」

私はその夜、ベルナの看病をしながら、ベッドの傍らで夢の世界に落ちていったのだった。



「な、なんでこんなことに……。本当にどうしよう……。っ。これって不敬罪にあたるのかしら……。ああ! ごめんなさい……。お兄ちゃん、先立つ不幸を——」

今にも泣き出しそうなおどおどした声で目が覚める。気付けば、私はベッド脇で寝ていたようだ。

顔を上げれば、ベルナが頭を抱えて、目に涙を溜めている。良かった……顔色もいいし、いつも通りみたい。

私がかき起きているのにも気付かないで、まだ不敬罪だとか、終わりだとか何かぶつぶつ言ってる。

私がおこへ運んだんだから、不敬罪になるはずなのに。大体私はまだ王太子妃でもないし。面白い子だ。

フツツと私の笑い声が漏れたところで、ベルナが私がかき起きていることに気付く。

「はわわっ！ リリアナ様っ!!」

「おはよう、ベルナ。元気になったようで何よりだわ」

「……リ、リリアナさまあ……」

ベルナは涙ぐみながら、胸の前で手を組み固まってしまった。キラキラと輝く瞳で私を見つめるその眼差しを向けられると、どうも気恥ずかしい。

まあ、でも、以前のような私に対する恐怖がなくなっただなら、良かった。私は昨日の成り行きを一応話しておこうかと口を開く。

「あの、昨日ベルナは——」

「ベルナっ!!」

急に部屋の扉が開いたと思ったら、がたいの良い騎士服を着た男がベルナの名を大声で叫んで、部屋に入ってきた。肩で息をしている様子からして、相当急いで来たらしい。

その人はベッドに座るベルナを見つけると、一目散に駆け寄った。その目に私など全く入っていないようで、私は彼に弾き飛ばされないようスツとベッドから離れた。

「ベルナ!! 本当に無事で良かった……。人間に監禁されていると聞いて、兄ちゃんはどうだけお前を心配したか! 人間の侍女になるのを阻止しなかったことを心の底から後悔した。でも、良かった……ベッドでゆっくり寝かせてもらってるってことは、その人間は捕まったんだな!? ああ、お前が無事で——」

「お兄ちゃんっ!!」

ベルナは顔を真っ赤にして、頭からフシューフシューと湯気を出している。

また今にも熱で倒れそうだ。

「……べ、ベルナ?」

お兄ちゃんと呼ばれた彼は、戸惑いを隠せないようだ。

「リリアナ様に失礼なこと言わないで! リリアナ様は昨日倒れてしまった私を看病し

てくださっていたのよ!? しかも、自分のベッドまで貸してくださって！ 大体、リリアナ様を人間だなんて呼ばないでよっ、リリアナ様は女神のようなお方なの！ 私の恩人であるリリアナ様に失礼なこと言うお兄ちゃんなんて……大っ嫌い!!」

そう言い放ったベルナは、「大嫌い」の一言と共に、特大のビンタをお兄さんにお見舞いした。

な、なにもそこまでしなくても……と思うが、身内の喧嘩に立ち入る勇気なんてない。アイナはなんだか楽しそうに私の肩の上でニヤニヤと見学している。この迫力にはビビっているというのに、なかなかの度胸だ。

「だいきらい………ベルナが……俺を……」

お兄さんは痛そうなベルナのビンタよりも大嫌いと言われたことがよほどショックだったようで、放心状態だ。しかし、ベルナはまだ怒りが収まらない。

「お兄ちゃんは何にもわかかってない！ リリアナ様はそんな人じゃないって手紙にも書いたのに、私の話を信じないで、馬鹿な話を信じるなんて!!」

「でっ、でも、現ににんげ……リリアナ様はここにいないだろ？ ということは、お前を監禁した罪で捕まって——」

「リリアナ様はそちらにいらっしやるじゃない」

呆れたようにそう吐くベルナ。なかなか身内には厳しいらしい。

そして、ギギギと音を立てそうな動きで彼の顔がこちらに向けられる。真っ青な顔に残るビンタの痕が痛々しい。

「………あなたがリリアナ、様？」

「あー、はい。そうですけど………とりあえず大丈夫です？ 頬」

苦笑いしながらそう告げると、なぜかお兄さんの顔はブワツと赤く染まった。

「ただ大丈夫ですっ!!」

そう言った彼の鼻からはツーツと鼻血が流れる。

「血！ 鼻血出てますっ!!」

結局、その後私たちは鼻血の処理やら看病の片付けやらをした。ベルナはともかく、私はお兄さんの前で、寝巻さのままいるわけにはいかなかったので、着替えたかったし。

「この度は大変ご迷惑をおかけしました」

私の前ではブレン兄妹が揃って頭を深々と下げていた。

全てが落ち着いてから、ベルナを看病することになった経緯を話したところ、二人は深く深く頭を下げた。なんとか顔を上げてもらって、微笑みかけると、兄は顔を赤く染

め、妹は恍惚の表情でこちらを見つめた。

……なんか大丈夫かな？ この兄妹。

二人は反応が大袈裟なところだけじゃなく、顔もよく似ていた。クリクリとした茶色い瞳、少し癖の強い紺色の髪、可愛らしい白い小さなツノまで。

ベルナのお兄さんはイズ・ブレンという名で、その見た目通り騎士らしい。私が嫁いできた時はちょうど遠征中で、今朝方、帰ってきたばかりだとのこと。そして、妹であるベルナの顔を見に行った。

しかし、ベルナの姿はどこを捜しても見つからず、他の侍女に話を聞いた。そこで彼はベルナが私の専属侍女になったことを初めて知った。同時に、昨晚私の部屋に行ったきり戻ってきていないこと、監禁されて酷い目に遭っているだろうということ、いつも私の部屋に行く時、ベルナはビクビクしていたことを聞いたそうだ。そして、愛する妹を想うと居ても立っても居られず、私の部屋に突入したというわけだった。

「まったく、お兄ちゃんは考えなしなんだから！ 皆リリアナ様のことを知らないから、あることないこと言ってるのよ！ それに私はリリアナ様に会う時、失敗しないか緊張していただけで恐れていたわけじゃないんだからね」

……私の目から見てもビクビクして恐れているように見えたけど、あれも緊張しているだけだったの？
ベルナは回復してから人が変わったようによく話すようになった。お兄さんが隣にいるから、というのもあるのだろう。一方で兄のイズは、険しい顔をして、拳を握りしめている。

「本当に申し訳ありませんでした。不敬罪で処罰されても仕方のないことです……」

「もう……ベルナだけじゃなくあなたまで……。私はまだ王太子妃になったわけじゃないし、不敬罪なんかにあたらないわよ。それに妹想いのいいお兄さんじゃない。一晚、妹が帰ってこないと聞いたら心配してしまうのも無理ないわ」

「リリアナ様は、お美しい上になんてお優しいのでしょうか……！」
痒くなるから、ベルナ、そのうつとりとした表情で見つめないで。

「ベルナの言う通りです。リリアナ様は寛大で、その上……か、可愛らしくて。まるで……妖精のようです」

褒めてくれてるのはわかるけど、妖精の本性を知ってるが故に褒められている気がしない……。二人には見えていない私の親友がゲラゲラと机の上を転がって笑っている。「二人とも大袈裟よ。誰だって目の前で人が倒れたら看病するでしょ？ それに、私にも妹がいてね……。身体が弱い子で、私が看病してたのもあって、人のお世話をするの

は慣れているの。よく熱を出す子だったから、私はいつも熱冷まし薬草を持ち歩くようになったわ。それが癖でまだ靴に入ってた。それが今回役に立ったの、本当に良かったわ」

「薬草……ですか？」

「あら？　こちらでは使わないのかしら？　魔族と人間の身体の構造はほとんど変わらないと聞いていたから、使ってしまったんだけど、まずかったかしら……。えっと、ちよっと待ってね……」

私は残りの薬草を靴から取り出して、二人の目の前に持ってきた。

「この薬草。キキユラって植物なんだけど……って、どうしたの？」

気付くと、二人は目を見開き、固まっている。

「リ、リリアナ様……この薬草を私に？」

「ええ、そうよ。一般的なものだし、問題ないかと思って……。でも、もしかして、身体には合わないものだった？」

「……………そんなことはありません。それどころか……」

「それどころか？」

「魔族にとって、このキキユラは万能薬に等しいのです」

二人が深刻そうな顔をするから、大変なものを飲ませてしまったかと思ったが、万能薬と聞いて私はホッと胸を撫で下ろした。

「良かった。薬つてことは問題があるわけじゃないのね？　でも、ちゃんと確認せずに飲ませてしまって、ごめんなさい。これからは気を付けるわね」

「いえ、こちらこそ、こんなに貴重なものを……申し訳ございませんでした。この恩は一生働いて返してまいります」

「貴重？」

おかしな話だ。キキユラは確かに栽培が難しいものの、それほど高値で取引されるものではない。帝国には専門農場だってあるし、コツさえ覚えれば一般家庭でも育てることができる。私の実家では妹がキキユラを必要とすることが多かったので、家で使う用に育てていたくらいだ。

その時、私の疑問に答えるようにイズが口を開いた。

「帝国ではキキユラの価値がどのくらいか存じませんが、シルワ国においてキキユラは高値で取引されている貴重な薬です。国内での栽培はできず、帝国からの輸入に頼っています。まず一般家庭では手に入れることはできませんし、帝国から入るのも年に一回程度です。……帝国では普通に取引されているのも、今日初めて知りました……」

私は手元のキキユラを見た。こんな普通の薬草を高値で、しかも年に一度しか輸出しない。嗜好品ならともかく、薬になるものをここまで出し渋るなんて、シルワ国への嫌がらせとしか思えない。ある程度は外交だから仕方ないとはいえ、ケチすぎやしないかと帝国にふつと怒りが湧く。

「教えてくれてありがとう。この薬草については私も育てた経験があるし、何か力になれることがないか、陛下たちに話してみることにするわ」

「私からもゼノ殿下にそれとなく話しておきますので」

「イズから？」

「はい。実はゼノ殿下とは幼馴染でして。殿下は疑り深い性格故、リリアナ様からの説明だけだと話を聞こうともしなそうなので……申し訳ありません」

「なぜイズが謝るのよ。問題はゼノ殿下でしょ？ って、これこそ不敬罪ね」

私が少し困った顔をしてイズに言うと、彼は笑った。

「ふふっ、私の前では構いません。臣下ではなく、殿下の幼馴染として聞いておきます。これからも困ったことがあればなんでもご相談ください」

「そうですよ、リリアナ様！ どんどんこき使ってください！」

「……ありがとう」

そう言って笑いかけてくれる二人を見て、グッと胸が熱くなる。シルワ国に来てから、初めてこの国での味方ができたような気がした。



それから十日後、私はようやく陛下と王子殿下と話をするタイミングを作ってもらうことができた。二人の晩餐に招待されたのだ。

普段は二人とも忙しいらしく、私は一人で食事を摂ることが多いため（私に会わないようにする口実かもしれないが）、今日は初めての三人揃っての晩餐となる。

「アイナ、行くわよー」

私はいつでもどこでも私についてくる小さな親友に声をかけた。しかし、アイナは私の呼びかけに意外な返事をした。

「ごめん、今日は部屋で休んでいい？ 最近やけに眠くて……」

アイナは大あくびをした。最近アイナはよくご飯を食べ、よく寝ている。太ったというわけではないが、心なしか身体が大きくなった気もする。私はアイナしか妖精を見たことがないので、彼女らの平均サイズはわからないのだが、成長期なのだろうか。顔色

が悪いわけでもないし、私は少しばかりの心細さを感じたものの、アイナを休ませることにした。

「もちろん、構わないわ。私についてきて環境や気候の変化もあったろうし、疲れてしまったのかもね。今日はゆっくり休んで」

「ありがとー。あ、今日の話はあとで聞かせてよね。あと、私がないからって羽目を外さないように」

「羽目を外すって、そんな場所も相手もないわよ」

「いるじゃない、イケメン婚約者様が」

「敵対心むき出しの、ね」

「……それもそうね。リリって男運ないのかしら……」

「言わないで、私も気にしてるんだから」

「リリの側じゃ、ドキドキのラブロマンスは期待できそうにないわね」

そんな話をしながら、私はアイナを残して自分の部屋を後にした。

「本日はお忙しい中、お時間を取ってください、ありがとうございます」

私がそう言って頭を下げると、陛下は柔らかに笑ってくださいました。

隣のゼノ殿下はにこりともしないが。

「いやいや、こちらこそそらくにおもてなしもできず申し訳ない。今日はゆっくり皆で食事を楽しもう」

晚餐はほとんど私と陛下の会話によって進んでいった。他愛もない会話だったが、久しぶりに誰かと一緒に食べる食事は美味しかった。陛下も機嫌が良く楽しそうにしている。案の定、ゼノ殿下は一言も話さないが。

「朝晩は同じ食卓を囲みたいと思ってるんだが、そう上手く時間も取れなくてな、了承いただきたい。こちらでの生活はどうかね？ 何か不便は？」

陛下がこちらでの生活ぶりを気にかけてくださる。帝国に対して思うことも多いだろうに、私にはこうやって穏やかに話しかけてくださる……本当に器が大きく、優しい方だ。

「とても良くしていただいています。美味しい食事に、質の良いドレス……侍女の皆様もよくお世話してくださいませわ」

ベルナ以外にはいまだに恐れられています、とは言わないでおく。
しかし、私の言葉にゼノ殿下が嘔みつく。

「あんな粗末な食事とドレスを見て、良くしていただいているなんて、よくそんな嘘が

つけたもんだな。どうせお前も今までの人間と同じように、俺たちのことを見下しているんだろが」

「ゼノ、いい加減にしないかっ!! ……くっ、ゴホゴホ」

「陛下!?」

陛下が突然大きく咳込んだので、慌てて席を立ち、私は陛下に駆け寄る。

「父上に触るなっ!」

私はゼノ殿下の制止も聞かず、陛下のお側でその背中をさすった。背中を撫でると、ごつごつとした骨が手に感じられる。……一国の主がこんなによせ細っているなんて……何かのご病気かしら。

「はあ……。ありがとう、もう大丈夫だ。はは……驚かせてすまないな。最近は身体が弱ってきて困るの」

「どうかご無理をなさらないください」

「ありがとう。そなたは優しい子じゃな」

「ちっ、父上、こんな奴に騙されては——」

「ゼノ、黙れ。そなたは私の言葉を繰り返し否定して、私に恥をかかせたいのか」

「……そういうわけでは……。申し訳ございません」

私を射殺そうかとはかりに睨みつけていた彼は、しゅんと下を向いた。

「すまないな、リリアナ。こんな馬鹿息子で。王太子の役割を理解できてないわけではなからうに。まったく……情けないことじゃ」

先日から陛下は私に対して謝ってばかりだ。会うたびに「ゼノがすまん……」と弱々しく笑うのだ。色々と心労をおかけしている上に、息子のことで悩ませるなんて、これじゃいけない。

私は意を決して立ち上がり、ゼノ殿下の前に立った。

私の予想外の行動に彼は戸惑っているようだったが、怪訝そうにこちらを見つめる。

「……何か、文句でもあるのか?」

「はい、あります。殿下はいい年して、こんなに陛下にご迷惑をおかけして、恥ずかしくないのですか? その反抗的な態度が陛下を悩ませていることに気付いていないんですか?」

「……んんっ。もしそうだとしてもお前に言われる筋合いはないっ!」

「いえ、私はいずれ殿下の妻になります。十分に口を出す権利があります。こちらに嫁ぐ以上、陛下は私の親です。親の心配をするのは当たり前です」

「心配だなんて、そんな薄っぺらい嘘——」

「それが嘘かどうかなんて、殿下にわかるんですか?!? 殿下は私が人間であること以外、何を知っているんですか!?!」

「……そ、それは……」

「帝国の人間だから憎いのはわかります。しかし、人間だからといって全員が悪党になるんですか? ……それは、魔族だから恐ろしいと決めつけている帝国の人間とやっていることが変わらないじゃないですか!」

殿下は押し黙ってしまった。

「私はシルワに来て、実際に皆さんと話して、人間と魔族はそう大きく変わらないと思えました。確かに帝国の権力者は腐っています。今までこちらに来た人間の振る舞いも酷かったかもしれない。でも、それによって私自身の価値を決めないでほしいんです。私はこの国を帝国以上の国にしたい」

二人は哑然としてこちらを見ている。私はポケットから薬草を取り出した。

「今日、お二人と話す機会をいただいたのも、この薬草の話をするためです」

「それはキキユラ……」

「そうです。先日、私の専属侍女が倒れた時、私は自分の鞆に入れてあったこれを彼女に飲ませました。そこで人間には熱冷ましの効果くらいしかないこの薬草が、魔族では

万能薬として使われていると知りました。そして、私はこの薬草を育てたことがあるのです。苗さえ輸入していただければ、私のノウハウでこの薬草が国内で栽培できるように――」

「無理、じゃ」

「え?」

陛下の大きなため息が聞こえて、私は思わず振り返った。

陛下は厳しい表情をしながら言った。

「無理、なんじゃよ。この土地では、ほとんどの植物が育たないのだ。大地の精霊王の加護を失ってしまったからの」

「大地の、精霊王?」

「そう。昔、この大陸には四つの精霊王が住んでおった。風、火、水、そして大地。それぞれの精霊王は生き物にその加護を与え、国を作った。風の精霊はエルフに、火の精霊は獣人に、水の精霊は人間に、大地の精霊は魔族に。大地の精霊の加護を失うまで、この国は最も作物が育つ土地じゃった。しかし、ある日突然シルワ国は大地の精霊王の加護を失った。今、植物を育てられるのは限られたひと区域だけじゃ。……それ以外は帝国からの輸入に頼るほかないのじゃよ」

「そんな……」

「食は命……帝国との関係性を断ち切るというのは、私たちの命綱を切るということじゃ。……リリアナ、申し訳ないが、シルワを帝国以上の国にするのはどうやっても無理なんじゃよ」

「そう、なんですか？」

納得なんてしたくなかった。私は不敬にも陛下に異議を唱えた。

「え？」

「本当にそうなんですか？ どうやっても無理なんですか？ シルワが帝国より勝っているところもあるはずだし、他の国と同盟を結ぶことだって——」

「無理じゃ。エルフも、獣人も、精霊至上主義じゃからな……精霊王の加護を失った我々は精霊王に生きることを許されなかった者と認識されておる。我々を助けるのは精霊王の意思に反することだと思っておるのだろう」

「……そんなことって……」

精霊王の加護の何がそんなに重要なのか。精霊の加護がなくなると確かにそこには人がいるわけで、その人たちに死ねとでも言うつもりか。私は強く奥歯を噛んだ。

「リリアナ、シルワのことを考えてくれてありがとう。確かにそなたは今まで来た人間

とは全く違うようじゃ。帝国以上の、という夢は叶えてあげられないだろうが、どうか一緒にこの国をより良い方向へと導いてもらいたい」

「……もちろんです。私にできることがあれば、なんでもいたします」

「それは頼もしいな。さて、申し訳ないが、今日はここでお開きにしても良いか？ 身体具合が少し、な」

そう言うと、陛下が立ち上がろうとする。それを支えようとしたが、私より早くゼノ殿下が駆け寄った。

「父上、どうかご無理は」

「ははっ。それがわかっているなら、早く私を安心させい。この馬鹿息子が」

口ではそう言うが、そう話す陛下の顔は少し呆れたような笑みを浮かべ、愛情に溢れていた。その顔だけでどれだけゼノ殿下のことを大切に思っているかがわかる。

……彼は愛情をたくさん受けて育ったんだろうな。

二人が寄り添う姿を見て、私はいつもニーナの方ばかり見つめていた父の背中を思い出していた。

あの後、陛下とゼノ殿下は部屋に帰っていった。帰り際に私が持っていた薬草を全て

渡し、陛下に使ってくださいと言うと、陛下は笑顔でそれを受け取ってくださいました。あのゼノ殿下でさえ私に「ありがとう」と言った。それだけキキユラは高価で特別なものなんでしょう。キキユラは魔族にとつての万能薬というけれど、どのくらい効くのでしょうか。陛下の病状が良くなるといいな……

私はそんなことを思いながら、晚餐会場で一人、お茶をすすっていた。使用人は外に出ているため、この広い部屋には私一人だ。

「さて、私一人長居しても迷惑だろうし、そろそろ部屋に帰ろうかな」

そう立ち上がろうとした時、会場の扉が開いた。

「……ゼノ、殿下？」

驚いたことにゼノ殿下が晚餐会場に戻ってきた。彼は、私の真向かいにどかっと座った。

意味がわからず、なんと声をかけていいかわからない。彼は私とお茶をするためにこの場に帰ってきたんだろうか。しかし、椅子に座ったわりに彼が話す雰囲気はなく、すっかり冷えたお茶をすすっている。私は話しかけていいものか迷うが、このまま埒が明かないのも嫌なので、こちらから声をかけてみる。

「あの……新しいお茶でも淹れましょうか？」

「いい」

一蹴。まじで何のために戻ってきたんだ、こいつ。少しキレそうになりながらも、引き撃る笑顔を貼り付けた。私、本当に令嬢の鑑だと思う。

「えっと、では、殿下はなぜここに戻られたのですか？」

沈黙。……こいつと話すの面倒くさいな。貼り付けた笑顔がとうとう剥がれ落ちるかという時、ようやく彼が口を開いた。

「本当か？」

……なんだ？ こいつは王太子なのにまともに言葉も使えないのか？ イライラが募るが、ぐっと堪える。

「本当か？ ……と、申しますと？」

「……帝国以上の国にしたいと言ったことだ」

「ええ、本心です。心から本気でそう思っています」

「お前は……俺たちが怖くないのか？」

「怖い……ですか？ いえ……そう感じたことはありませんが」

確かに魔族はツノこそ生えているが、逆にそれ以外の違いなんてほとんど見当たらなかった。事前に帝国で聞いてた話と違って、彼らは本能のままに生きているということ